

陸信忠筆「仏涅槃図」(奈良国立博物館所蔵、南宋時代・13世紀、重要文化財、以下本図)は、その入念かつ色鮮やかな絵画表現が印象的な南宋仏画の優品で、寧波の仏画師、陸信忠の銘をもつ作品群の中でも最も質の高い作品のひとつである。しかし、他の絹本の涅槃図には見られない図像や表現が多く、本図を積極的に論じる研究は少ない。先行研究では、釈迦を取り囲む仏弟子の表情やしぐさが諧謔味を帯びた異様な表現とみなされ、沙羅双樹を極楽浄土の七層の宝樹に表す点などから、本図を明時代以降に描かれた祝祭的雰囲気をもたえる涅槃表現の嚆矢と位置付けられている。

本発表では、特異とされる図像の源泉を、中原や北方地域で出土した北宋・遼の墓室壁画や浮彫の涅槃像等に求め、他の南宋仏画の絵画表現や『涅槃経後分』の記述にも着目しながら、本図が伝統的あるいは同時代的な図像を引用しつつ再構成された涅槃図である可能性を指摘したい。

当時の涅槃会における堂内荘嚴については、先行研究でも紹介されている自慶編『増修教苑清規』(至正七年・1347)が参考となる。寧波の市街地に位置する有力な天台寺院、延慶寺では、法堂に涅槃仏像を安置し、その左右には涅槃会に結集した諸法蔵、諸菩薩僧、諸縁覚僧、諸声聞僧の四つの位牌を並べたとされる。使用された儀軌は北宋の仁岳撰『釈迦如来涅槃礼賛文』であり、南宋時代の延慶寺でも同様の儀礼がおこなわれていた可能性は高い。中尊の涅槃仏像が彫像か画像かは不明であるが、仮に本図について、中幅として制作された可能性を考えると、本図に描かれた参集が少ない点も頷けよう。本図は左右対称性を意識した求心的な構図であり、これも中幅とした場合の視覚的効果を狙ったものと考えられる。

また、延慶寺の涅槃会における堂内荘嚴は、発表者が以前明らかにした南宋時代の水陸画の懸用法に類似する点は注目される。南宋第二代皇帝孝宗の宰相を務めた史浩は、12世紀末頃に故郷の寧波の東銭湖畔に水陸会をもたらし、水陸画として十界像を設けたと考えられるが、現存作例から想定されるその内訳は、「仏・法・僧」、「菩薩」、「縁覚」、「声聞」に六道を加えた十幅であった可能性が高い。本図の場合は釈迦としての「仏」と仏弟子としての「僧」を表しており、その左右に「諸法蔵」、「諸菩薩僧」、「諸縁覚僧」、「諸声聞僧」の位牌が並ぶとすると、堂内に祀られる尊像の構成要素が共通する。史浩は延慶寺の僧に帰依しており、水陸画を制作する際にも延慶寺の堂内荘嚴が参考とされた可能性が考えられる。このことは、本図が延慶寺の文化圏の中で制作された可能性を高めるとともに、延慶寺の規範性、あるいは周辺寺院との影響関係を考えるための具体例を提供しうると思われる。